

## ■ ヤツデ . . .



クワを筆頭に、ネズミモチやヤツデは知らず知らずに庭先に枝を張っているということがよくあります。いずれも小鳥がその実を食し、その糞とともに子孫を増やしていくのです。当団地でも、ヤツデが、11号棟の北側の植え込みと8・9号棟間の路地に育っていました。

秋から冬の花の少ない季節、次々と長期間にわたって花を咲かせ、昆虫に貴重な蜜を提供しています。このような季節はずれの開花によって、昆虫の来訪を確保し、受精を確実なものとしています。さらに、特別甘い蜜も用意していて、ブドウやカキなどの果実の糖度が、せいぜい15～20なのに対して、ヤツデの花は、クリーム色の花床（かしょう）に糖度50以上といわれる甘い蜜が分泌されていると言いますから驚きです。右上の写真に黒く見えるのはすべて蜜を吸いに来た昆虫です。

ところで、ヤツデは漢字で「八手」と書きます。確かに手のひらに似ているとはいえ、実際は、7または9（奇数）に裂けており、8つに裂けていることはほとんどありません。

では、なぜ「八」かといえば、おそらく古くから漠然と数が大きいことを示すのにもよく使われているからだと思います。例えば、八島・八雲・八重桜・八百万（やおよろず）などが多い例でしょう。



また、本当かどうか確認できませんでしたが、学名の“Fatsia”は、日本語の「八」（古い発音で「ふあち」）または「八手（はっしゅ）」に由来するという説もあります。

しかし、何と言っても一番の驚きは、1つの花が雄花から雌花に変わるということでしょう。まず、咲き始めは雄花の時期で、「雄性期（ゆうせいき）」と呼ばれます。おしべが成熟して花粉を出し、蜜も出します。やがておしべと花びらが散り、続いて、それまで小さかっためしべが伸び始めるのです。この時期が雌花としての性質をもつ「雌性期（しせいき）」で、やっぱりこの時も甘い蜜を出し、花粉をつけた昆虫を呼び込むというわけです。

植物には、自家受粉で増える植物と他家受粉でなければ受精できない植物とがありますが、ヤツデのような後者の植物としては、このように、おしべとめしべの成熟する時期がずらすことで、同じ花の花粉がめしべに着くことを避けていることとなります。自然の素晴らしい知恵です。



上の写真では、左が雄性期、右が雌性期の花の様子です。